



環インド洋地域研究  
Indian Ocean World Studies

TINDOWS Working Papers No. 2

植民地科学者としてのアーノルド・リース  
—ラクダ調査、反ユダヤ主義、極右思想—  
楠 和樹

Arnold Leese as a Colonial Scientist  
His Expertise on Camels and Radical Right Ideology  
Kazuki Kusunoki

2023年4月

人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業「環インド洋地域研究プロジェクト」東京大学拠点  
The University of Tokyo Indian Ocean Worlds Studies (TINDOWS)

植民地科学者としてのアーノルド・リース  
—ラクダ調査、反ユダヤ主義、極右思想—

楠 和樹\*

**Arnold Leese as a Colonial Scientist:  
His Expertise on Camels and Radical Right Ideology**

Kazuki Kusunoki\*

Recent scholars of the British Radical Right movement during the interwar period have paid attention to the relationship between their ideas and imperialism. They insist that the empire supplied a framework for diagnosing and resolving Britain's problems. To better understand this framework, this article examines the ideology of Arnold Leese, one of the prominent fascists of this period, especially focusing on the continuity of his career as a colonial scientist and a political activist.

From 1907 to 1914, Leese served as a veterinary specialist in the British India and East Africa Protectorate. His specialty was on the various diseases of camels, and he worked hard on the highly infectious trypanosomiasis, which was locally called *surra*. His approach against this disease was distinctive in that he consistently relied on the epidemiological model based on the germ theory of this time. The scientific method to identify and trace a pathogen later prompted him to elaborate on the conspiratorial ideology of anti-Semitism when he went back to Britain after the World War I. He diagnosed a variety of political problems at home and abroad literally as a 'camel doctor', sniffing out traces of the Jews everywhere. As his political ideology was supported by empiricism and scientific certainties, he pursued anti-Semitism more thoroughly than the contemporary far-right activists.

---

\* 東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構 (kkusunoki@g.ecc.u-tokyo.ac.jp)

## 1. はじめに

1924年3月、イギリスの東部に位置するスタンフォードという小さな街で突如としてファシズムの運動が盛り上がった。この動きを牽引したのが、街で動物診療所を営んでいたアーノルド・リースである。リースは、イギリスで最初のファシスト政党であるイギリス・ファシスト党（British Fascists）の支部として自宅を開放し、集会を開いて賛同者を募った。さらに、地元の町議会議員選挙に立候補して当選し、地方自治の場からファシズムの実現を目指した。しかし、結果的にその野心が実を結ぶことはなかった。1928年、彼はギルドフォードに移り住み、新天地で同志とともに帝国ファシスト連盟（Imperial Fascist League）を組織し、『ファシスト』、次いで『ゴシック・リップルズ』という機関紙の発行を通じて支持の拡大に努めた。その後も1956年に亡くなるまで、投獄経験を経ながらも政治活動の場に身を置き続けた。

リースが活動を始めた戦間期は、イギリスで極右の運動が起こった時期だった。第一次世界大戦を経て、イギリスはさらに海外の領土を拡大し、世界的な大国としての地位を強固なものにしていた。しかし、そのことは同時に、共産主義、民主主義、そしてユダヤ人の勢力が密かに浸透し、この国の利益を脅かしているのではないかという懸念を引き起こした。極右運動の核になったのはこのような脅威の認識であり、上記のほかにもブリトン人（The Britons）やイギリス・ファシスト連合（British Union of Fascists）などの団体が同時期に結成された [Stocker 2021: 1-16]。

リースは同時代の極右活動家と、反共産主義、反自由主義、反ユダヤ主義のイデオロギーと、陰謀論的な思考を共有していた [Holms 1979: 161-170; Lebzelter 1978: 68-85; Morell 1980]。一方で、彼はトーマス・リネハンの表現を借りると「当時もっとも狂信的で、風変わりで、妥協を知らないファシストのひとり」 [Linehan 2000: 71] だった。彼が率いた帝国ファシスト連盟は支持者が少なく、イギリス・ファシスト連合のような広範な大衆的支持を集めることはなかった。しかし、その思想は第二次世界大戦後のイギリスの極右運動に影響を与えたとされており、現代的な観点からも重要な人物である [Richardson 2011: 38-39]。

リースの経歴において注目に値するのが、彼が40代に入ってから政治に「目覚めた」という点である。スタンフォードに居を定めて動物診療所を開くまで、彼は科学者として国外で働いていた。専門は獣医学で、亡くなる5年前に刊行された自伝『周りに合わ

せず一反ユダヤ主義のラクダ専門医が送った二つの人生における出来事』の奇妙な副題が示すように、とくにラクダの疾病の研究をおこなっていた [Leese 1951: 50-51]。彼の職業的なキャリアはインド、東アフリカ<sup>1</sup>、ソマリランドと、この動物が生息地とするイギリス領の各地を転々とするものだった。そのため、従来の研究ではもともと彼の政治的関心は高くなかったこと、その思想は独自に形成されたものではなく、ネスタ・ウェブスター、ヘンリー・ビーミッシュ、アーサー・キットソンなどの同時代人に由来することが指摘されてきた [Holmes 1979: 163; Lebzelter 1978: 73-74]。

この点について、ライアン・リバードとポール・ストックカーは最近の研究で別の見解を示している [Liburd 2019: 97-138; Stocker: 2021: 98-101]。彼らに共通するのがイギリスの帝国と極右の関係というテーマであり、そこではリースのような活動家の経歴と思想において帝国がどのような役割を果たしたのかが中心的な問いとなる。彼らによると、リースは早い時期から人間は人種によって異なり、平等ではないという考えの持ち主だった。そして、6年を過ごした多民族国家のインドでの経験はその考えを確信に変えたに過ぎないのだという。この議論は思想的な連続性を強調することで、その背景となった帝国の文脈の重要性を浮かび上がらせている。

本稿はイギリスの極右が育まれた土壌を帝国という視点から捉える必要があるという点で、リバード、ストックカーと立場を共有している。ただし、リースのインド時代に人種主義者の萌芽が認められるという彼らの解釈には、全面的に同意するのが難しい。というのも、この主張が依拠する自伝と機関紙はいずれもイギリス帰国後に書かれたものであり、その時点の意図や思想が反映していると考えるのが自然だからだ。そこで、本稿では別の角度から彼の帝國的な側面に光を当てることを試みる。それは、リースの植民地科学者としての、つまりラクダを専門とする研究者としての実践である。この時期についてはアジア帝国史を専門とするジェームズ・ヘヴィアの研究で検討されており、本稿の第3節もその記述に依拠しているが、極右研究者のあいだでは見過ごされてきた [Hevia 2018: 218-249]。しかし、その重要性は自伝に見られる次のような箇所からも明らかである。

---

<sup>1</sup> 本稿における「東アフリカ」は、現在のケニア共和国におおよそ相当する。この地域は1895年から1920年まで、イギリス領東アフリカ保護領と呼ばれていた。その後は法的地位が代わり、ケニア植民地に改称されている。

…私は『ユダヤ人の脅威』について調査してきた。ここで強調しておきたいのだが、私は世界中でラクダの疾病について調査していた当時の科学的精神に則って、この調査をおこなってきた。プロパガンダに踊らされることなく、真実を追求した。実際のところ、私は政治-身体 (body politic) の疾病の調査に従事したのである [Leese 1951: 50-51] 。

このように、彼自身は明らかにみずからの政治活動を科学的な調査の連続線上に位置づけていた。ここで問われるべきなのは、彼が政治活動をどのような意味で科学的だと捉えていたのか、そして一見して自明な「科学的精神」が何を意味するのかという点である。というのも、それは単なる科学的真理に対する合理的な態度以上のことを含意していると考えられるからだ。

その意味を明らかにするため、本稿は彼の植民地科学者としての実践を検討する。ここではとくに、彼がインドと東アフリカでどのようなアプローチによってラクダの調査研究に従事したのかに焦点を当てる。また、この検討を踏まえて彼の政治活動の根底にあった「科学的精神」がどのようなものだったを明らかにするとともに、イギリスの極右の帝國的なルーツの一端を示すことが本稿の目的である。

## 2. 教育と馬の診療

1878年11月、リースはイギリス北西部に位置する、アイリッシュ海に面したライサムという小さな町で中流階級の家産に生まれた。彼は8人兄弟の7人目で、上にひとりの兄と5人の姉がいた。自伝によると、彼にとって年齢の離れた兄姉との関係はぎこちないもので、家族は居心地の良い空間ではなかったようだ。孤立しがちな少年の心を支えたのは身近な動物たちだった。「ただひとつ、今になって振り返っても思い出せるのは、すばらしく、思いやりのある動物の愛情だった。それは生涯を通じて私の喜びだった」 [Leese 1951: 3] 。彼が最初に飼ったのはジプという名前のホワイトテリアで、深い愛着を寄せたという。のちにインドに渡った際にも、帰英後にスタンフォードに落ち着いた際にも、彼の傍らには犬、猫、馬などの伴侶動物がいた。

リースは中等教育を、実家から近いノースヨークシャーのパブリックスクールで受けた。父親は在学中に亡くなっている。卒業後の彼は、母親の強い意向を受けてロンドン

の金融街シティで会計事務所に職を得た。しかし、3年ほど過ごした金融業界はその肌に合わなかったようだ。事務所を辞めた彼は「愛する動物とともに生きる」ことを決意し、祖父の経済的な支援を受けてロンドンのカムデンに位置する王立獣医学校に入学した [同上]。

のちの植民地科学者としてのキャリアを理解する鍵になるのが、彼が在籍した世紀転換期の獣医学教育をめぐる状況である。当時のイギリスには獣医学を教える単科大学が4校あり、このうちもっとも長い歴史を持つのが1791年に創設された王立獣医学校だった。獣医を目指す若者はそのいずれかで学び、卒業時に修了証書を取得した。しかし、これらの大学は修了生に高い収入と社会的地位を約束できないという問題を長らく抱えていた。その理由としては、正規課程の教育を受けた獣医が専門家として広く認知されていなかったことや、大学で教えられる知識が社会的に有用ではなかったことが挙げられる。人々は彼らにとってもっとも重要な家畜である馬が病気になると、獣医ではなく、依然として蹄鉄工や鍛冶屋などのローカルな職能者に頼っていた [Fisher 1993: 287]。

獣医のあいだでは、早くからこうした状況が問題視されていた。1830年代頃から教育の制度と内容を改革する動きが見られ、1842年には王立獣医学校に牛病理学の教授職が置かれた [同上]。とはいえ、その動きは当初は緩慢であり、獣医学側がただちに社会的な要請に応じて変化したわけではなかった。この点で転機となったのが、ロベルト・コッホとルイ・パストゥールによる科学的成果を端緒とする19世紀後半の「細菌学革命」である [Worboys 1991]。近代細菌学は人間を対象とする医学に新たな道を切り開いたが、それは動物の病気を扱う獣医学の分野についても同様だった。王立獣医学校でもその影響はただちに表れ、細菌学の教授職が置かれ、1891年には実験室が開設された。また、同校の学生はそうした制度的な整備以前から、ロンドン熱帯医学校やキングス・カレッジで講義を受けることを許可されていた [Cotchin 1990: 118; Wilkinson and Hardy 2001: 17]。リースはこうした教育改革の恩恵を被った新世代の学生のひとりだった。

1903年の夏に大学を卒業し、獣医の資格を得たリースは、ロンドンの動物診療所で職を得た。彼はそこでさまざまな動物を診察したが、おもな対象は馬だった。馬は当時の都市生活にとって不可欠な「生ける機械」 [McShane and Tarr 2007] であり、自家用車や乗合馬車などのサービスを通じてロンドンの交通を支えていた。彼によると、獣医はさまざまな病状を示す馬に対して「シャーロック・ホームズのように」対処する必要が

あった。「ほとんどの場合、獣医が相手をする患者は嘘をつかない。ただし、彼らの苦しみの多様なシグナルが何を意味するのかをすばやくかつ十分に理解するためには、綿密な観察のトレーニングを積む必要がある」 [Leese 1951: 8-9]。身体の状態を正確に観察し、持ち主から聞き取りをおこなった上で適切な診断を下すという、この時期に現場で培われた能力は、のちに植民地科学者としての彼の仕事を大いに助けることになった。

リースはその仕事に適性を感じていたようだ。しかし同時に、長期的にはその見通しは良好とは言えなかった。彼にとって、自動車の普及とともに馬の姿で溢れた街の景色が一変し、その治療の需要も低くなっていくのは目に見えて明らかだった [Leese 1951: 11]。一念発起したリースは診療所を辞職し、母校に戻って2か月間の研究課程の教育を受けた。このとき、医師免許の取得者がときに本国よりも帝国に活躍の場を求めたのと同様に [Haynes 1999: 208-213]、彼の目は海外に向けられたのかもしれない。その後、首尾よくインドの民事家畜医務局にポストを得て、イギリスをあとにした。

### 3. インドのラクダ調査

リースが地中海からインド洋の船旅を経てボンベイの地を踏んだのは、1907年6月のことである。彼はそこから陸路でパンジャブ州のラホールに向かった。インドで彼に用意されたポストは、民事家畜医務局に新設されたラクダ疾病担当家畜医務官だった。その後、彼は6年の長期にわたってインド北西部<sup>2</sup>の全域でラクダの疾病の調査に取り組んだ。

のちに彼はラクダの専門家として世界的に知られることになるが、そもそもなぜインドの北西部でこのポストが置かれたのかについては説明が必要だろう。ラクダはこの地域の歴史を語る上で不可欠なアクターである。より広い視点に立つと、この地域は「サハラシア」と呼ばれる生態的な連続体の一部に位置づけられる [Gommans 2018: 51-77]。それは北アフリカから西アジアと中央アジアを経て、インド亜大陸の東部と南部にいたる一帯を指しており、全体として乾燥した気候と降水量の少なさによって特徴づけられる。そのため、伝統的な生業としてはモロコシやトウジンビエなど乾燥に強い穀物の栽

---

<sup>2</sup> ここで言う北西部とは、インド帝国の行政区画としてはパンジャブ州、シンド州、バローチスタン州、北西辺境州、そしてピカニールとバハーワルプールの藩王国に当たる。

培や、乏しい植生下で放牧可能なラクダやヤギなどの牧畜が営まれてきた。それだけでなく、ラクダはサハラシアの長距離交易の担い手でもあった。インド北東部はアフガニスタンやシルクロードの諸都市、そしてペルシア東部の市場をむすぶネットワークの一端であり、商品はラクダなどの動物によって運搬された [Hevia 2018: 15-17]。

イギリス以前のインド北西部の支配者は、この家畜が統治の—とりわけ軍事的な—手段として有用であることに目を付けた。そのひとつが、インド亜大陸の多様な生態環境を版図に収めたムガル帝国である。ラクダの身体は山岳部や森林地帯に適さないものの、平坦な乾燥地ではその運搬力を大いに発揮する。アクバル大帝は自身の軍隊におよそ 6000 から 7000 頭を擁していた。それに加えて、軍事遠征の際にはバローチやラバイなど北西部の諸集団からさらにラクダと牧夫が調達されたという [Gommans 2002: 126-128]。他方で、ラクダは兵站用だけでなく戦闘の道具としても用いられた。とくに、18世紀中頃にアフガニスタンからドゥッラーニー帝国の侵攻を受けたのちに、それは顕著になった。ドゥッラーニーの部隊は移動性の高さを重視していた。そのため、速度の劣る重騎兵や戦列歩兵ではなく、ラクダの軽騎兵を採用した。この部隊のラクダの鞍にはザンブーラキと呼ばれる旋回砲が備え付けられており、駄載した状態で使用可能だった。この軍事技術がかなりの威力を示したことから、侵攻を受けた北西部のラージプート、シク、そしてローヒラーなどの人々もそれを取り入れていった [Gommans 2002: 169-179]。

ムガル帝国の衰退とともにそれに代わって支配者の地位を占めたイギリスもまた、ラクダを頼った。18世紀末からインド亜大陸全域で領土的拡大を進めていたイギリスにとって、北西部は最後に残された土地だった。イギリスはヒンドークシュ山脈に向けて南下するロシアに対抗するためにこの地域を掌中に収めるとともに、アフガニスタンを経済地帯にしようとした。この背景のもとで起こったのが、第一次 (1838~1842年) と第二次 (1878~1880年) の二度にわたるアフガン戦争だった。アフガニスタンの地形は険しい山岳地帯が優勢である。そのため、侵攻時には寒冷地に強い品種のラクダが北西部で多数調達され、馬やラバなど他の家畜とともにインド陸軍の兵站用に動員された [Morrison 2014: 462-476]。

インドにおけるラクダと人間の関係史という点では、アフガン戦争は以下の二つの点で大きな転換点になった。第一に、おびただしい頭数のラクダが従軍中に死亡した [同



上]。原因は過酷な環境、栄養失調、感染症の流行などにあったが、究極的にはイギリス人の支配者がこの動物の健康を確保するための知識も制度も備えてないことが問題だった。この問題は第一次戦争時にすでに認識されていたが、二度目の侵攻の際にも悲劇は繰り返された。第二に、ラクダをはじめとする運搬用家畜の処遇が第二次アフガン戦争後に改善された。ジェームズ・ヘヴィアによると、死亡率など運搬用動物に関する様々な統計的な情報が収集され、その扱い方のマニュアルが作成されるなど、体系的な管理体制が整備されたという [Hevia 2018: 182-217]。また、このときある動物疾病に対する科学的な関心が高められた。それは、現地のパンジャープで「スーラ」と呼ばれてきた病気であり、科学的にはトリパノソーマ・エバンシという原虫によって引き起こされるトリパノソーマ症のひとつに当たる<sup>3</sup>。この病気が運搬用動物のおもな死因だと判明したこと、そして病原菌説、顕微鏡、皮下注射針などが導入され、インドの科学技術をめぐる状況が大きく変わったことを背景として、1880年代からスーラの研究が飛躍的に進んだ。それはちょうどインドの家畜医療が制度的に移行していた時期でもあり、1892年には民事家畜医務局が設置され、1905年から同局がスーラの問題に対処することになった [Hevia 2018: 218-249]。アーノルド・リースが赴任した当時のインドの状況とはこのようなものだった。

リースはおもにインド北西部をフィールドとして、ラクダの疾病の問題に従事した。住血吸虫症、胸膜炎、気管支炎なども彼の研究対象に含まれたが、もっとも注力したのがスーラであった [Civil Veterinary Department 1911: 4-7]。ただし、彼はこの感染症に取り組んだ最初の科学者だったわけではない。すでに1880年には、インド陸軍の獣医グリフィス・エヴァンスがデーラー・イスマーイール・ハーンで調査をおこない、ラクダや馬のスーラを引き起こす原虫を発見した。それはのちにトリパノソーマ・エバンシと呼ばれることになる [Evans 1918]。その後、科学研究の焦点はそれがどのように感染するのかのメカニズムに移ったが、この点について研究者の見解は分かれた。一方で、帝国細菌学者の地位にあった病理学者のアルフレッド・リンガードは、トリパノソーマ・エバンシが消化器系を通じて感染すると考えた。他方で、リンガードの下で働いたレナード・ロジャースはそれとは異なる可能性を検証した。彼は南アフリカにおけるデ

---

<sup>3</sup> トリパノソーマ症の制圧に向けた近代的な取り組みの歴史について、磯部（2018）と山内・北（2008）の研究を参照。

イビッド・ブルースの研究成果をもとに、この原虫がサシバエによって媒介されることを主張した。このメカニズムはロジャースによって「機械的感染」と表現された [Hevia 2018: 218-249]。

リースはこの問題について、決定的な成果を収めた。その際に疫学的なアプローチをとったのが、彼の研究の大きな特徴である。彼の任期の大半は、気温が高く乾燥した地域でのフィールドワークによって占められた [Leese 1951: 16-18]。彼は二人の現地人助手とともに、つねに「聖書ではなく顕微鏡をポケットに入れて」 [Moulin 1996: 168] ラクダの生息地を転々とした。フィールドでは感染個体の血液検査や、サシバエの生活環などについての聞き取り調査がおこなわれた。リースはその結果を踏まえて、スーラが完全に機械的に感染すること、サシバエがその原虫の媒介生物であることを結論づけたのだった [Hevia 2018: 218-249]。

リースによる経験主義的な調査は、彼がロンドンの動物診療所で培った観察と聞き取りの能力がここでも有用だったことを物語っている。あるいは、彼が熱帯医学の専門家に一般的に期待されていた、冒険を希求し、危険で過酷な環境にも耐える精神を備えていたとも言える [Neill 2012: 44-72]。もっとも、より重要なのはその疫学的な手法が同僚の研究者たちとは対照的だったという点のほうだろう。リースがフィールドワークを重視したのに対して、後者の中心は研究所での実験だった。しかも、インドでは 19 世紀末から細菌学研究所が丘陵部に置かれ、乾燥地から離れていた。その背後にあった論理はヒル・ステーションと通底しており、埃まみれで蒸し暑い熱帯的な環境から隔てられた空間を確保し、ヨーロッパ人科学者の健康と社会的地位を保つことにあった [Kennedy 1996]。前述のリンガードは帝国細菌学研究所の移転に際して、その立地としてクマーウン丘陵に位置するムクティシュワールを推奨した中心的な人物のひとりだった [Chakrabarti 2012: 62-75]。

このように、リースとリンガードは別々の方向からスーラの感染メカニズムの解明を試みたのだが、彼らは異なる認識論的な前提に依拠していたのではなかった。というのも、両者の違いは近代的な細菌学を別様に受容した結果として解釈できるためである。細菌学の発展とともに病気が他の原因ではなく様々な病原菌によって引き起こされることが明らかになったものの、それが単一の理解に収斂したわけではなかった。現実には、病原菌の性質については複数の理解が併存し、競合する状況が生まれたのだ [Worboys

1996]。18世紀以降、インドのイギリス人医師たちは熱帯に見られる病気の原因がその気候にあるという思考を深めていった。19世紀の後半に病原菌説がこの国に持ち込まれたとき、この環境論的な枠組みは排除されたのではなく、むしろそのもとで新たな理論が受容された。リングードもそのうちのひとりである。彼にとって重要なのは、病原菌のはたらきを正確に把握することだった。そして、そのためには熱帯の環境の影響を受けない「飛び地」のような研究所で実験と観察を行わなければならなかった [Chakrabarti 2012: 62-75]。他方で、リースは病原菌と宿主のラクダだけでなく、それと媒介生物のあいだの相互作用を包括的に明らかにする必要があると考えていた。このような疫学的なアプローチについては、病原菌を保有する個体のみを焦点を当てる細菌学の登場とともに衰退したと整理されることがある [Neill 2012: 60-65]。しかし、実際には世紀転換期から欧米の研究者は病原菌説を組み込むかたちで、疫学調査の手法をさらに発展させていた [Gradmann 2010; Leavitt 1992]。リースの調査はこうした科学的潮流と、彼の個人的な経験と能力による産物だった。

両者の理論的な立場の違いは、対策の方向性にも反映していた。リングードが追求したのは化学薬剤による治療であり、研究所内で有機ヒ素化合物の実験をおこなった [Lingard 1894]。リースも同様の実験に取り組み、アトキシル、アンチモン酒石酸カリウム、ヒ酸ナトリウムなどを試みた [Civil Veterinary Department 1911: 6]。しかし、彼は疫学的な研究成果に基づいてそれ以外にもさまざまな衛生対策を提言した。たとえば、媒介生物のサシバエの幼虫が運河や氾濫原に見られることから、陸軍の運搬用ラクダ部隊に対してその利用を避けるよう推奨した。疫学的な視点に立つと、彼の提言は妥当な内容だったと言える。とはいえ、ラクダの健康を確保することは必ずしも植民地支配にとって優先順位の高い項目ではなかったことから、一部を除いて実際には着手されなかった [Hevia 2018: 227-238]。

1912年、リースはラクダ疾病担当家畜医務官の職を解かれた。どのような経緯でこの決定が下されたのかは不明である。ただし、ヘヴィアはこの点について、先に述べた理論的な対立状況が背景にあったという説得的な推測を示している [Hevia 2018: 238-248]。リースは、リングードをはじめとする民事家畜医務局の高官と知識産出の様式の点で対照的な立場をとっていた。そして、前者は後者にあからさまに反発しており、逆に後者は前者の疫学的な研究を高く評価していなかった。

自伝によると、リースはこのときインド政府から象の調査を担当するポジションを打診されたという [Leese 1951: 21]。ラクダ関連の業務からは外れるものの、インドに留まる選択肢が用意されたのだ。この事実は、自伝を彩る些事のひとつとして片付けることはできない。インドでは 20 世紀初頭の時点で、全般的に象は軍事や運搬という伝統的な役割を失いつつあったものの、ミャンマーで林業を支える労働力として需要が高まっていた [Saha 2022: 54-68]。そのため、同時期には象に関するマニュアルや論文が出版され、その利用の標準化が進んでいた [Griffith 1910; Steel 1885]。

「愛する動物とともに生きる」ために獣医学の専門家の道に進んだリースだったが、この申し出は受け入れられなかった。その理由について、彼は後年次のように振り返った。「私は次のように考えた。少なくとも 300 年のあいだ働きつづける—あり得そうにないことだ—のでない限り、そうした対象 [象] の専門家になるのは難しいだろう、と。また、この仕事について私は本当の意味で専門家だが、ただの素人がどうやって通常の人生の期間内に十分な経験を積むことができたのか、想像できないほどだ。そのため、ラクダに関わりつづけることに決めた」 [Leese 1951: 21]。ここには、ラクダの知識に対する強い自負心が表れている。リースはインドで歴史的な偶然から担当することになったこの動物に、自身のキャリアを賭けたのだ。その病気のメカニズムを理解し、対処するための手法は民事家畜医務局内で支持されなかったが、独立心の強い彼は意に介さなかった。

インドを離れてイギリスに帰国した彼は、ラクダの調査を続けられる国でポジションを探した [Leese 1951: 21-22]。帰路のエジプトには 2 週間滞在し、求職活動をおこなっている。帰国から 2 ヶ月後、リースのもとに東アフリカ保護領からオファーが届き、これを引き受けた。

#### 4. 東アフリカのラクダ調査

1913 年、リースは東アフリカに赴任した。新たな身分は、家畜医務局に属する家畜医務官である。インド時代と同じくラクダの問題を担当することになったため、その任地はこの動物の生息地に限定された。それは、行政区画としてはジュバランド州と北部辺境県の二つを管轄することを意味した [Department of Agriculture of British East Africa 1915: 140]。地理的に言うと、それは東アフリカの北東部に、具体的にはジュバ川とト

ウルカナ湖に挟まれた広大な低地帯に相当した。この地域はインドの北西部からは遠く離れているものの、生態環境としては乾燥したサハラシアの一端をなしており、ソマリをはじめとする牧畜民がラクダなどの家畜を放牧しながら暮らしてきた。

彼がラクダの専門家として雇用された背景は、インドの場合と同じく帝国の領土的支配とかかわっていた。この時期、保護領政府はおもにハイランドと呼ばれる南西部の高地地方に注力しており、ヨーロッパ系の住民による入植と換金作物生産を推し進めていた。それに対して、全般的に資源の乏しい北東部は経済的な重要性が低く、その領有は他国の進出を阻止するという政治的な側面が強かった。そのため、当初の影響圏はキスマヨ周辺の海岸部にとどまっておらず、その先までは手が及ばなかった。しかし、世紀転換期になると内陸部でも次第に支配の範囲が広がっていった。その際、政府は反抗的な行動をとった集団に対して軍事討伐をおこなったのだが、国内の通常戦力は小規模だったためインドからの派兵に依存した [Blyth 2003: 93-131]。興味深いことに、このときインドからは兵士だけでなく、軍用と運搬用のラクダも送られてきた [Money 1903]。前節で述べたように、イギリスはインド北西部での経験からラクダが優れた軍事的手段だと認識していた。そして、その力はスーダン、ソマリランド、そして東アフリカと、サハラシアの国々でも活用されたのだった [Intelligence Branch of the Divisions of the Chief of the Staff Army Head Quarters 1907]。さらに、それらの部隊は東アフリカの北東部でも有用性を証明することによって、当地でもラクダ部隊と、ラクダを使った運搬部隊の創設を後押しする結果となった<sup>4</sup>。「この広大で水場のない地域 [ジュバランド] では、拠点間のコミュニケーションの回路の確保はラクダにかかっていた」 [Department of Agriculture of British East Africa 1915: 140]。このようにしてラクダの健康維持が解決すべき課題として浮上し、リースのような経験豊富な人材を必要とする状況が生じたのである。

インドと比較すると、この地域の主要な牧畜民であるソマリのラクダ利用は「もっとも原始的な様式」と特徴づけられる。つまり、彼らはおもに搾乳を目的としてこの家畜を飼育するのであって、乗用の文化は持たず、運搬の用途も限定的である [Bulliet 1990: 38-41]。したがって、部隊で乗用されるラクダは現地で調達されるのではなく、

---

<sup>4</sup> TNA (The National Archives of the United Kingdom)/FO 403/310, Memorandum by Sir C. Hill, 10 July 1901; C. Eliot to the Marquess of Lansdowne, 15 July 1901.

海外から輸入された。また、運搬用のラクダはソマリから入手されたものの、規律化を必要としていた。彼は東アフリカでの任期のほとんどをジュバランドのフィールドで過ごし、これらのラクダの調達、訓練や、鞍をはじめとする装備の検査など、管理体制の改善に努めた [Department of Agriculture of British East Africa 1915: 148]。

リースはここでも疾病の調査に従事した。とくに関心を引いたのがトリパノソーマ症である。インド時代にもっとも熱心に取り組んだこの感染症はジュバランドでも広く見られ、多大な被害をもたらしていた。インドのスーラと同じく、ここでもトリパノソーマ症には急性と慢性のふたつの症状が認められた。急性の場合は毎日高熱が続いて衰弱して数週間で死に至り、慢性の場合は4か月以上の長期にわたって症状が見られた。現地のソマリは前者を「ガンディ」、後者を「ドゥカン」と呼び分け、それぞれツェツェバエとアブが原因だと認識していた。それに対して、リースは血液検査、症状の観察、そしてスーラの調査経験から、これらが二種類のトリパノソーマの原虫によって引き起こされると考えた。また、感染にはアブとツェツェバエだけでなく、その他のサシバエもかかわっている可能性があるかと推測を立てた [Department of Agriculture of British East Africa 1915: 152-157]。

リースはその在任中に、感染の経路とメカニズムについて結論を下せなかった。それは、ジュバランドでは実験をおこなうための設備が整ってなかったためである。当時の政府は家畜医療の分野を重視しておらず、調査研究と治療のためのリソースも人員も、インドとは比べ物にならないほど不足していた。彼が赴任した1913年の時点で、同僚の家畜医務官は彼を除いて全国で9人しかいなかった [Department of Agriculture of British East Africa 1915: 124]。こうした状況下では、東アフリカのなかでも周縁的なこの地域で疫学的な実験をおこなうのは不可能であり、インドで一定の成果を挙げた化学療法を実施するのも現実的ではなかった。媒介生物の役割について不十分な知識しか持たないため、彼としてはツェツェバエやアブの生息域を避けたり、感染個体を隔離したりするよう提言するしかなかった。そのような消極的な介入が彼の知的関心を満たすことはなく、のちにこの時期について「このときの仕事は予防的なもので、非常に興味深いものではなかった」 [Leese 1951: 24] という。

リースは一年半という短い期間でこの職を離れることになった。その理由のひとつとして、彼は自分の上司に当たる家畜医務局長のロバート・ストーディーとの確執があっ

たと述べている [Leese 1951: 23-24]。彼はそれを個人的な相性の問題として説明しているが、それだけではなかったのだろう。ストーディーは東アフリカにおける家畜医療の行政と研究の整備に尽力した人物で、現に、その任期中に家畜医務局の体制は拡充されている。リースの任官もその一環として捉えることができる。とはいえ、ジュバランドは東アフリカの他地域に比べて優先順位が高くなかったため、ストーディーが彼にとって理想的な勤務環境を用意することはなかった。リースがインド時代に取り組んだのは、近代的な細菌学に基づいた疫学的な調査だった。それは、スーラという感染症について生態系のなかで病原菌と宿主の関係を包括的に捉えようとする試みである。そして、そのためには実験室内で病原菌のはたらきを観察するだけでなく、フィールドで観察、聞き取りの調査と実験をおこなう必要があった。インドではこのアプローチは専門家内で理解を得られなかったが、東アフリカでは物質的、制度的な制約のために満足なたちで実行できなかったのである。

結果的に、リースがこうした調査研究をその後おこなうことはなかった。1914年の末、彼は東アフリカを離れてイギリスの陸軍獣医部隊に中尉として入隊した。第一次世界大戦時には人間だけでなく馬、ラバ、ラクダなどおびただしい頭数の家畜も動員され、その管理と治療のために獣医も送られていた。彼もそのひとりとしてフランスの西部戦線に駐在し、おもに馬の健康管理と治療の業務を担当したという [Leese 1951: 28-34]。また、この間に一時的にソマリランドに派遣され、中東戦線に供給するために運搬用のラクダを調達する任務にもかかわった。それは、リースのキャリアとラクダが交錯する最後の機会になった。フランスで終戦を迎えた彼はイギリスに帰国し、スタンフォードで動物診療所を開いて第二の人生を歩みはじめたのだった。

## 5. おわりに

本稿ではここまで、アーノルド・リースが植民地でどのような「科学的精神」のもとでラクダの調査に取り組んだのかを検討してきた。インドと東アフリカでの任期中、彼にとってもっとも重要だったのがトリパノソーマ症の問題だった。彼がこの感染症に対処する際に採用したのが、細菌学説に基づいた疫学的なアプローチであった。彼の研究ではトリパノソーマの原虫だけでなく、それと媒介生物であるサシバエの相互作用を解明することに重点が置かれた。リースは化学療法の実験をおこなったが、それ以上に力

を入れたのがサシバエをコントロールするための衛生対策の模索だった。東アフリカでこの仕事を継続できない状況に置かれたのは彼にとって不満の種だったが、それは彼の調査研究に対する考え方が一貫していたことを物語っている。

リースの政治的なキャリアにおいて、科学的な背景は二つの点で重要な意味を持ったと考えられる。第一に、それは彼の言説に知的な正当性をもたらした。彼はみずからの著作物でたびたび「ラクダ専門医」や獣医の有資格者としての肩書きに言及し、それに学問的な権威を付与しようとしたのである。そして第二に、彼が植民地科学者として培った「科学的精神」は政治的な言論活動の足がかりになった。感染症の原因を病原体に求め、それが宿主に侵入する経路を明らかにしようとする疫学的なアプローチは、イギリスをとりまく世界的な政治情勢を診断するうえでも顕著に見られた。そして、彼にとって病原体とはユダヤ人にほかならなかった<sup>5</sup>。

イギリスへの帰国後のリースは典型的なアーリア人種論者であり、人種は肌の色、毛髪の色、頭蓋骨の形質などによって区別され、その特徴は遺伝の法則に従って世代を越えて継承されていくと考えていた。異なる人種のなかでもっとも優れているのがアーリア人であり、彼らのみが文明を築き、その恩恵を他人種に与えることができるとされた [Leese 1934]。他方で、彼らと対立する存在として位置づけられたのがユダヤ人である。彼の見立てによると、繁栄を誇ったイギリス帝国は国内外で危機に瀕しつつあった。ロシアでは革命が起こり、インドでは民主化に向けた動きが見られた。国際的な金融資本は隠然と力を強めつつあった。国内では国家が弱体化し、民主主義と自由主義が浸透しつつあった。そして、彼の診断によるとそのすべての動きの背後にはユダヤ人の姿が認められた [Leese 1947]。リースは彼らがすでにイギリスの上流階級にも浸透していると見ており、たとえば 1936 年に作成したパンフレットでは関係があるとされた貴族出身者を名指しで指弾した [Leese 1936]。彼の旺盛な言論活動は、いかにユダヤ人があらゆる経路からイギリスという政治-身体に侵入しているのかの包括的なメカニズムを暴き立て、市民の注意を喚起することを目的としていた。そして、その知的な基礎を与えたのが、彼が植民地科学者として培った「疫学的」な調査研究のアプローチであった。

<sup>5</sup> 同様に、世紀転換期のドイツでも黎明期の細菌学が政治的な含意を持ち、人種主義や反ユダヤ主義に対して疑似科学的な語彙をもたらしたことが指摘されている [村上 2021: 334-337]。



最後に、アーノルド・リースの植民地科学者としての側面に焦点を当てた本稿の議論は、どのような点で帝国と極右の関係の理解に資するだろうか。リバードが述べるように、「帝国はイギリスの問題を診断するための参照枠組みと、それを治療するための手段を提供した」 [Liburd 2019: 11]。実際、極右活動家の多くはイギリスと帝国が直面していた問題を同じ平面上で思考していた。リースの事例は、帝国によってもたらされた「参照枠組み」が狭義の政治的なものに留まらなかったことを示している。それは、環インド洋のサハラシヤ地域でラクダの問題に対処するなかで形成された「科学的精神」を含むほどの射程を持っていたのだ。そして、このことは極右思想を涵養したイギリスの帝國的な土壌の広がりを目を向ける必要性を示唆していると考えられる。

## 参考文献

- 磯部裕幸. 2018. 『アフリカ眠り病とドイツ植民地主義—熱帯医学による感染症制圧の夢と現実』みすず書房.
- 村上宏明. 2021. 『「感染」の社会史—科学と呪術のヨーロッパ近代』中央公論新社.
- 山内一也・北潔. 2008. 『〈眠り病〉は眠らない—日本発！アフリカを救う新薬』岩波書店.
- Blyth, Robert. 2003. *The Empire of the Raj: India, Eastern Africa and the Middle East, 1858-1947*, New York: Palgrave Macmillan.
- Bulliet, Richard. 1990. *The Camel and the Wheel*, New York: Columbia University Press.
- Chakrabarti, Pratik. 2012. *Bacteriology in British India: Laboratory Medicine and the Tropics*, Rochester: University of Rochester Press.
- Civil Veterinary Department. 1911. *Annual Administration Report of the Civil Veterinary Department for the Official Year 1910-1911*, Calcutta: Superintendent Government Printing.
- Cotchin, Ernest. 1990. *The Royal Veterinary College London: A Bicentenary History*, Buckingham: Barracuda Books.
- Department of Agriculture of British East Africa. 1915. *Annual Report, 1913-1914*, Nairobi: The Government Printer.
- Evans, Griffith. 1918. "Autobiographical memoir." *Annals of Tropical Medicine and Parasitology* 7: 1-16.
- Fisher, J. R. 1993. "Note quite a profession: The aspirations of veterinary surgeons in England in the mid nineteenth century." *Historical Research* 66-161: 284-302.
- Gommans, Jos. 2002. *Mughal Warfare: Indian Frontiers and Highroads to Empire, 1500-1700*, New

- York: Routledge.
- . 2018. *The Indian Frontier: Horse and Warband in the Making of Empires*, New York: Routledge.
- Gradmann, Christoph. 2010. “Robert Koch and the invention of the carrier state: Tropical medicine, veterinary infections and epidemiology around 1900.” *Studies in History and Philosophy of Biological and Biomedical Sciences* 41: 232-240.
- Griffith, G.H. 1910. *Elephants and Their Diseases: A Treatise on Elephants*, Rangoon: Government Printing of Burma.
- Haynes, Douglas Melvin. 1999. “The social production of metropolitan expertise in tropical diseases: The imperial state, colonial service and the Tropical Diseases Research Fund.” *Science, Technology and Society* 4-2: 205-238.
- Hevia, James. 2018. *Animal Labor and Colonial Warfare*, Chicago: University of Chicago Press.
- Holms, Colin. 1979. *Anti-Semitism in British Society, 1876-1939*, New York: Routledge.
- Intelligence Branch of the Divisions of the Chief of the Staff Army Head Quarters. 1907. *India Frontier and Overseas Expeditions from India Vol. 6*, Simla: Government Monotype Press.
- Kennedy, Dane. 1996. *The Magic Mountains: Hill Stations and the British Raj*, Berkeley: University of California Press.
- Leavitt, Judith Walzer. 1992. ““Typhoid Mary” strikes back bacteriological theory and practice in early twentieth-century public health.” *Isis* 83-4: 608-629.
- Lebzelter, Gisela. 1978. *Political Anti-Semitism in England 1918–1939*, London: The Macmillan Press.
- Leese, Arnold. 1934. *Race and Politics: A Counter-blast to the Masonic Teaching of Universal Brotherhood*, London: Imperial Fascist League.
- . 1936. *Our Jewish Aristocracy; A Tale of Contamination*, London: Imperial Fascist League.
- . 1947. *The Jewish War of Survival*, published by the author.
- . 1951. *Out of Step: Events in the Two Lives of an Anti-Jewish Camel-Doctor*, London: The Carmac Press, 1951.
- Liburd, Liam. 2019. *The Eternal Imperialists: Empire, Race and Gender on the British Radical Right, 1918-1968*, Ph.D. thesis, University of Sheffield.
- Linehan, Thomas. 2000. *British Fascism, 1918-39: Parties, Ideology and Culture*, Manchester: Manchester University Press.
- Lingard, Alfred. 1894. “Summary of further report on surra.” *The Veterinary Journal* 39-11: 311-315.
- McShane, Clay and Joel Tarr. 2007. *The Horse in the City: Living Machines in the Nineteenth Century*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Money, A.W. 1903. *Operations in Jubaland, 1900-1901: The Ogaden Punitive Expedition*, London:

War Office.

- Morell, John. 1980. "Arnold Leese and the Imperial Fascist League: The impact of racial fascism." *British Fascism: Essays on the Radical Right in Interwar Britain* (Kenneth Lunn and Richard Thurlow eds.), 57-75, New York: Routledge.
- Morrison, Alexander. 2014. "Camels and colonial armies: The logistics of warfare in central Asia in the early 19th century." *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 57: 462-476.
- Moulin, Anne Marie. 1996. "Tropical without the tropics: The turning point of Pastorian medicine in north Africa." *Warm Climates and Western Medicine* (David Arnold ed.), 160-180, Amsterdam: Brill.
- Neill, Deborah. 2012. *Networks in Tropical Medicine: Internationalism, Colonialism, and the Rise of a Medical Speciality, 1890-1930*, Stanford: Stanford University Press.
- Richardson, John. 2011. "Race and racial difference: The surface and depth of BNP ideology." *The British National Party: Contemporary Perspectives* (Nigel Copsey and Graham Macklin eds.), 38-61, New York: Routledge.
- Saha, Jonathan. 2022. *Colonizing Animals: Interspecies Empire in Myanmar*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Steel, John Henry. 1885. *A Manual of the Diseases of the Elephant and of His Management and Uses*, Madras: The Lawrence Asylum Press.
- Stocker, Paul. 2021. *Lost Imperium: Far Right Visions of the British Empire, c.1920-1980*, London: Routledge.
- Wilkinson, Lisa and Anne Hardy. 2001. *Prevention and Cure: The London School of Hygiene and Tropical Medicine*, London: Kagan Paul.
- Worboys, Michael. 1991. "Germ theories of disease and British veterinary medicine, 1860-1890", *Medical History* 35: 309-327.
- . 1996. "Germs, malaria and the invention of Mansonian tropical medicine: From 'diseases in the tropics' to 'tropical diseases'." *Warm Climates and Western Medicine* (In David Arnold ed.), 181-207, Amsterdam: Brill.